大都市近郊に位置する京都府木津川市鹿背山地区における 1880年代以降の里山景観の変遷

Changes in a *Satoyama* Landscape adjacent Big Cities since 1880s in the Kaseyama District of Kizugawa City, Kyoto Prefecture

岩佐匡展*・深町加津枝**・奥敬一***・福井亘*・堀内美緒****・三好岩生*

Masanobu IWASA*, Katsue FUKAMACHI**, Hirokazu OKU***, Wataru FUKUI*, Mio HORIUCHI****,
Iwao MIYOSHI*

(*京都府立大学大学院生命環境科学研究科, **京都大学大学院地球環境学学,

独立行政法人森林総合研究所関西支所, *金沢大学地域連携推進センター)

(*Kyoto Prefectural University Graduate School of Life and Environmental Sciences, **Kyoto University Graduate School of Environmental Studies,
Kansai Research Center, Forestry and Forest Products Research Institute, *Kanazawa University, Center for Regional Collaboration)

I はじめに

里山は、それぞれの地域に根ざした自然的、社会的条件によって形成されてきたため、地域ごとに独自性の高い側面を持つ。従って、里山景観の保全にあたっては、その形成、維持、変化の背景となった地域ごとの社会的な要因や、土地利用や資源利用などの変化を把握することが重要である¹⁾。また、里山を含む農山村景観の保全に関しては、構成要素や機能の凍結的保存ではなく、「環境と人との関係性」の継承を目指し、むしろ、社会的状況に合わせた変化を許容する動態保全を目指すべきとの議論も起きてきた²⁾。地域の里山景観の変遷を解明する事例研究の蓄積は、これらの課題や議論を適切に導くために必要であると考えられる。

里山景観の変遷に関する研究としては、地域住民の生業活動の中での資源利用と土地利用の変化³⁾や、それらと里山林の景観の変化^{4), 5)}との関係など、おもに山間地の事例で蓄積がなされ、大きくは社会全体での生活変化などのトレンドに影響されながらも、地域の産業的背景や文化などの条件によって、個別の景観変容の秩序があることが示されてきた。

しかし、歴史的に大都市周辺に存在した里山に目を向けると、都市の文化や消費の影響を受け、大消費地に向けた多様な生産活動が行われることにより、それを反映したより複雑な里山景観の変遷があったことが予想される。こうした都市の影響を強く受けた里山景観の変遷を、その形成要因と関連づけて理解することは、より広範な里山の保全利活用を考えるために重要である。

本研究で対象地とした京都府木津川市鹿背山地区（以下、鹿背山地区）は、奈良、京都、大阪という大都市の影響圏に交わる地域に位置しながら、農村集落として継続してきた地域である。歴史的に都市の影響を受け続けてきた里山景観の一事例であると考えられ、上記の問題意識の下で景観変遷を捉えるために適した場所である。

そこで、本研究では同地区を対象として、里山景観の変遷について、土地被覆の変化とその箇所、および地域資源の利用形態の変化に注目し、その変化の要因となった社会的背景と関連させて明らかにし、その変化と都市の強い影響との関連について示すことを目的とした。また、景観形成過程を解明する際の時間基点としては、明治期が重要である⁶⁾とされており、本研究においても主に明治時代の1880年代以降を対象とする。

II 研究の方法

1 研究対象地の概要

鹿背山地区（図1）は、京都府南端の木津川市に位置し、北側に木津川が流れ、面積は約360haである。京都市中心部の南方約30km、奈良市中心部の北方約5km、大阪市中心部の東方約30kmの距離圏に位置する

図1 対象地の概要
Fig.1 Location of the study area

都市近郊の里山である。2007 年の戸数は 199 戸、人口は 561 人である。

平均気温は約 15℃、平均年降水量は約 1500mm である。京都府では最も温暖で雨量も少なく、瀬戸内海型気候に属する⁷⁾。笠置山脈に属し、花崗岩質岩石からなる大野山の山頂 203m が鹿背山地区の最高地点である。その山頂周辺は小起伏山地地形であるが、全体的には標高 20～120m 程度の小起伏丘陵地地形となっている。

万葉集にもその地名が現れ、平城京へ瓦を供給したと考えられている奈良時代の瓦窯跡が残る。また、脆弱な地質と木材生産地としての早くからの発達や住民の林野利用に起因すると考えられる土砂流出防止のために、江戸時代初期には木津川流域の留山のひとつとして立ち入りが禁止される⁸⁾ など、歴史的にも大都市との関係の中で重要な役割を担っていた。

2 調査方法

調査は、地形図や空中写真に基づく土地被覆の判読、および地理情報システム（以下、GIS）による分析、文献調査および聞き取り調査による土地利用と地域資源の利用形態の変化、およびその要因となった社会的背景の把握に大別される。

まず、土地被覆の変遷を把握するために、明治期以降に実測・発行された地形図を全て収集し、地図記号の判読を行い、土地被覆を把握した。その中から、最古および最新の地形図に、明瞭な土地被覆の変化が見られた 2 時期の地形図を加え、合計 4 時期の地形図を分析対象とした。本研究で用いた地形図を表 1 に示す。対象地の範囲が 2 図幅に分割され、同一年内に測量がない地形図については、2 図幅合わせて 1 時期として、測量年の新しい方の年代を用いて表記した。以上の 4 時期の地形図について、各土地被覆を示す地図記号を参考に、GIS を用いて土地被覆図を作成し、各土地被覆の面積変化を求めた。土地被覆の分類は、地形図の発行年により異なっているが、各時期の土地被覆をより正確に把握するため、原図の地図記号の凡例に従った。土地被覆入力的基础データとして「数値地図 25000(空間データ基盤)」を、GIS のソフトウェアは ESRI 社製の Arc GIS(Arc View 9.1)を使用した。また、1908 年の地形図測量の後、1950 年代の

表 1 本研究で用いた地図資料
Table.1 Maps used in the study

縮尺	図幅名	測量年	種類	発行元
2 万分の 1	木津町	1887	仮製地形図	大日本帝国陸地測量部
2 万分の 1	奈良	1888	仮製地形図	大日本帝国陸地測量部
2 万分の 1	木津	1908	正式地形図	大日本帝国陸地測量部
2 万分の 1	奈良	1908	正式地形図	大日本帝国陸地測量部
2 万 5 千分の 1	田辺	1970	地形図	国土地理院
2 万 5 千分の 1	奈良	1972	地形図	国土地理院
2 万 5 千分の 1	奈良	2008	地形図	国土地理院

地形図までは土地被覆情報の改訂が行われていなかったと考えられるため、米軍の 1948 年撮影空中写真からも土地被覆図を同様に作成し、土地被覆変化を把握するために補足的に使用した。

次に、時間経過に伴う土地被覆の変容パターンに関わる分析を行った。まず、上記の 4 時期の地形図の中から、最古、1972 年、最新の 3 時期の土地被覆図を GIS 上で重ね合わせた。1972 年の地形図に着目した理由は、結果で示すように他の時期よりも特徴的な土地利用および里山景観の変化がみられたためである。重ね合わせにより多様な土地被覆の変容パターンを持つパッチが多数生成されるが、微小な誤差を考慮してパッチの合計面積が、対象地の全体面積に対し 1 % 以上になる土地被覆の変容パターンを抽出し、分析を行った。

文献調査では、旧木津町（現木津川市）による「木津町史」⁸⁾や、「関西文化学術研究都市開発地区緊急民俗調査報告書」⁹⁾などの資料を用いた。

聞き取り調査は、2007 年 11 月 21 日から 12 月 18 日にかけて、60 歳以上の鹿背山在住者 17 名（男性 14 名女性 3 名）に行った。主な聞き取り項目は、土地利用や地域資源利用とその変化および社会的背景についてである。

III 土地利用および里山景観の変遷

1888 年、1908 年、1972 年、2006 年の 4 時期の地形図について、GIS を用いて土地被覆図を作成し、土地被覆の属性ごとの面積を求めた。表 2 にその面積比を示す。4 時期を通して、面積比が 1 % 未満の土地被覆については、「その他」にまとめた。図 2～5 に 4 時期の土地被覆図を示す。なお、仮製地形図の地図記号の解釈は小椋¹⁰⁾

表 2 3 時期の土地被覆ごとの面積(%)
Table.2 The ratio of the area of each land cover in three periods

凡例	年代			
	1888年	1908年	1972年	2006年
集落	3.3	3.7	4.2	5.3
水田	14.8	17.4	14.0	10.3
畑	15.3	15.0	5.4	2.0
果樹園	0	0.1	14.7	11.9
ため池	1.0	1.0	0.6	0.7
竹林	0	0.5	0.2	11.1
樹林及樹林	25.0	-	-	-
広葉樹林	-	10.7	8.1	17.7
松林(小)	34.0	-	-	-
針葉樹林	-	43.2	40.0	18.0
尋常荒地	3.4	-	-	-
荒地	-	0.7	1.7	11.9
ゴルフ場	-	-	5.4	6.0
その他	3.2	7.7	5.7	7.1
合計	100(380ha)			

その他は、1888年については茶畑、河川、墓地、道、1908年については桑畑、茶畑、河川、線路、道、1972年については茶畑、河川、水道施設、焼却場、線路、道、2006年については河川、墓地、水道施設、その他施設の合計

図2 1888年の土地被覆
Fig.2 Land cover in Kaseyama in 1888

図3 1908年の土地被覆
Fig.3 Land cover in Kaseyama in 1908

図4 1972年の土地被覆
Fig.4 Land cover in Kaseyama in 1972

図5 2006年の土地被覆
Fig.5 Land cover in Kaseyama in 2006

に従い、仮製地形図にのみ用いられる「楢林及柵林」は「広葉樹林」に、「松林(小)」は「針葉樹林」に、「尋常荒地」は「荒地」に、それぞれ対応するものと考えた。1888年には、山地はナラやクヌギ林を示す

所の多くが「針葉樹林」に変化していた。

1972年における土地被覆ごとの面積は、1908年に比べ農地部分で顕著な変化が見られた。「果樹園」の面積が大幅に増加した。一方で「畑」の面積が大幅に減少していた。図4をみると、中南部の小起伏丘陵地において、1908年には「畑」や「針葉樹林」であった箇所を中心に、「果樹園」が大規模に展開している。また、北部の山地では「針葉樹林」と「広葉樹林」の配置が大きく変化した。

2006年における土地被覆ごとの面積は、1972年に比べ「水田」、「畑」、「果樹園」や、「針葉樹林」の面積が減少した一方で、「竹林」、「広葉樹林」、「荒地」が大幅に増加していた。図5からは、各土地被覆が細かいパッチで混在している様子がわかる。

次に文献調査、聞き取り調査から明らかになった土地利用や地域資源の利用形態の変化について、変化の要因となった社会的背景と関連付けてまとめた結果を示す。

1880年代の鹿背山地区では、畑での商品作物の栽培が盛んに行われており、サツマイモ、柿、茶に加え、瓦、陶器類、薪、繭が生産され京都、伏見、奈良へ水運や陸運で輸送されていた。鹿背山地区でのサツマイモ栽培は江戸時代に始まり、京都府下で最も早い時期の栽培開始とされている⁸⁾。また、種類が豊富で質にも優れた陶土が生産されたため、瓦や、鹿背山焼と称される陶磁器の生産が、江戸時代より行われていた。陶土は、明治時代初期には伏見人形や京焼の原料としても大量に供給された¹¹⁾。陶磁器生産に際しては、登り窯1回の焼成に一昼夜で1500束以上の松割木を消費する¹²⁾とされており、陶磁器や瓦生産の燃料として、割木や柴の需要が高い時期

「楢林及柵林」と、マツの低木林を示す「松林(小)」からなり、急峻な斜面は、矮小な樹木が混生する多様な雑草地や裸地である「尋常荒地」となっていた。

1888年の「楢林及柵林」と1908年の「広葉樹林」、1888年の「尋常荒地」と1908年の「荒地」の面積を比較すると、1908年は1888年に比べ、「広葉樹林」および「荒地」の減少が顕著であった。土地被覆図上でも北東部の山地において変化が見られ、「尋常荒地」が「広葉樹林」と「針葉樹林」に変化し、1888年に「楢林及柵林」であった箇所

であったと考えられる。しかし、近隣地域においては1890年代後半から鉄道が敷設され、1910年代には全国の鉄道網に組み込まれた。このため、瀬戸などの大生産地から大量生産された安価な陶磁器が近畿圏へも流入し、鹿背山地区での陶磁器生産はこれに圧倒され、1910年までには廃窯になったと考えられている¹²⁾。

1910年代から1950年代頃までの土地利用や地域資源の利用形態については⁹⁾、稲作に加え、傾斜地の畑でのサツマイモや、柿を中心とする果樹園での商品作物栽培が、冬季の農閑期においては、割木を作るために山へ入り木を伐採するヤマキが行われていた。クヌギやコナラなどの伐採周期は7～10年と短伐期であった。割木は自家用の燃料にもされたが、冬期の現金収入源として多くが販売された。クヌギはより高値で取引されるため植林が行われていた。マツは大径木を単木的に残し、建材として利用したが、松割木も瓦屋へ持ち込まれ、瓦生産の燃料に使われた。

1908年の地形図測量の後、1950年代の地形図までは土地被覆情報の改訂が行われていなかったと考えられるため、この間地形図上での土地被覆の変化は乏しい。しかし、1948年の米軍撮影空中写真や、聞き取り調査によると、戦時中から戦後1950年代の食糧難の際に、畑の開墾拡大が行われ、実際には土地被覆にも変化が見られた。食糧難の都市部へサツマイモを供給するために、既存の畑から山手に向かって森林部分を開墾し、山地の耕地化が図られていた。この開墾拡大時に、商品作物としてより価値が高い柿の果樹園が畑に転換されることは、ごく少なかった。他にも、パルプの原料としてマツの大径木の強制伐採が行われるなど、1940年代から1950年代にかけては戦争とその後の混乱の影響を受けた土地利用や

地域資源の利用形態の変化がみられた。

1950年代中頃から、現在の鹿背山地区の特徴的な景観である柿を中心とする果樹園の一層の増加が生じた。食糧事情の安定や1970年に始まる米の生産調整などを主な要因として、より商品価値の高い柿生産にシフトするためである。戦中戦後の食糧難の際に拡大した畑から果樹園への転換や、水田から果樹園への転用があったことが聞き取り調査からも示された。その時々で市場で高値に取引される柿の品種の導入が、積極的に行われた。また、全国的な木材需要の高まりから、換金価値が高いとされたスギ・ヒノキの植林も行われた。一方で1960年代は、割木づくりや刈り草の堆肥化など、それまで継続されてきた地域資源利用の多くが停止した。

1970年代以降は、農業従事者の高齢化、兼業化、離農の進行など農業の斜陽化が顕著になった。鹿背山地区に近接する地域での関西文化学術研究都市の建設や、大規模な住宅開発の影響を受けた時期でもある。1974年から1977年にかけて、鹿背山地区でも山林と農地の一部が開発用地として買収された。聞き取り調査によれば、開発用地となると耕作停止が求められることも、農地の荒廃が進んだ要因であるとされた。

以上の結果から、鹿背山地区の里山景観の変遷は大きく5時期に類型区分できた(図6)。

第1期は、農地、里山林に加え、土採り場など様々な土地利用がみられた1888年から1910年頃である。この時期は、瓦や陶磁器生産の燃料として割木や柴の需要が特に高く、森林部においては、それを反映した松林と雑木林の景観が展開していた。

第2期は、鉄道網の発達に伴う輸送手段の変化という社会状況を受けた1910年頃から1940年頃である。陶磁

器生産という一つの生産活動が衰退したことにより、瓦や陶磁器生産の燃料としての割木や柴の需要が低下し、それに伴い新たな商品作物の栽培が森林域に広がり始めるなどの変化があった時期である。

第3期の1940年頃から1950年代は、戦中戦後の食糧増産に伴う畑の開墾拡大など、戦争の影響を直接的に受けて土地利用が転換された時期である。

年代	土地利用・地域資源利用								キーワード	時代区分
	水田	畑	果樹園	陰伐地	割木生産	落ち葉掻き	植林	陶磁器生産		
1880				日照確保、肥料・燃料供給					陶磁器生産	第1期
1890										
1900										
1910								鉄道網発達	鉄道網発達	第2期
1920									陶磁器生産停止	
1930		畑開墾拡大					スギ・ヒノキ植林			
1940					プロパンガス普及				戦中戦後の食糧増産	第3期
1950				日照確保のみ					果樹園・人工林増加	
1960	果樹園へ転用								地域資源利用停止	
1970	住宅・都市整備会社による用地取得								大生産地販路拡大	第4期
1980	耕作放棄地、竹林の拡大									
1990										
2000										

図6 鹿背山地区における1880年代以降の土地利用および地域資源利用の変化
Fig.6 Change in land use and local resource use since the 1880's in Kaseyama

第4期は、食糧事情の安定から果樹園の増加がみられ、それまで継続されてきた地域資源利用の多くが停止する1950年代から1970年代である。森林域では針葉樹人工林の拡大と、果樹園への転換が顕著になった時期である。

第5期は、農業の衰退、および開発の影響により耕作放棄地が目立った1970年代から現在までである。

IV 土地被覆の変容パターン

1888年、1972年、2006年発行の3時期の地形図をGIS上で重ね合わせ、土地被覆の変化を明らかにした。土地被覆の変容パターンとその面積を表3に示す。

表3より、土地被覆の変容パターンのうち、面積割合が5%を超えるC、F、Iの3パターンは、いずれも針葉樹林・広葉樹林間の変化であることがわかる。その中で、2006年に「広葉樹林」となっていたCとFの2パターンは、聞き取り調査より1972年にはマツ林であったとされる箇所が、マツ枯れ被害後に「広葉樹林」へと推移したと考えられる。一方、2006年において「針葉樹林」となるIのパターンは、マツ枯れ後か、広葉樹林が伐採された後に、スギ・ヒノキの植林が行われたものと、聞き取り調査および現地踏査より判断できる。

それらの次に面積の大きな変容パターンとして、主に柿の「果樹園」に関するM、N、Oの3パターンがある(図7)。果樹園の拡大には、従来からの畑に加え、戦中戦後に山地に向けて開墾拡大したサツマイモ畑から果樹園へ大規模に転用したもの(M、O)と、それよりも後に森林部の開墾を行い小規模に拡大したもの(N)の2つのパターンがあった。これらのパターンはいずれも、北部の急傾斜地を避け、中南部の緩斜面部にまとまって分布していた。集落や水田周辺に位置したマツ林や畑の多くが柿を中心とする果樹園に変化したのである。

表3 土地被覆の変容パターンごとの面積(ha)
Table 3 Areas of each changing pattern of the land cover in Kaseyama

記号	年代			面積(割合)
	1888年	1972年	2006年	
A	尋常荒地	針葉樹林	針葉樹林	7.7(2.1%)
B	松林(小)	ゴルフ場	ゴルフ場	15.4(4.2%)
C	松林(小)	針葉樹林	広葉樹林	18.7(5.1%)
D	松林(小)	針葉樹林	竹林	9.2(2.5%)
E	松林(小)	針葉樹林	荒地	8.7(2.4%)
F	榎林及柵林	針葉樹林	広葉樹林	21.3(5.8%)
G	榎林及柵林	針葉樹林	竹林	11.1(3.0%)
H	榎林及柵林	針葉樹林	荒地	5.5(1.5%)
I	榎林及柵林	針葉樹林	針葉樹林	19.0(5.2%)
J	榎林及柵林	広葉樹林	針葉樹林	5.4(1.5%)
K	榎林及柵林	広葉樹林	荒地	4.2(1.1%)
L	榎林及柵林	広葉樹林	竹林	5.9(1.6%)
M	松林(小)	果樹園	果樹園	11.4(3.1%)
N	松林(小)	針葉樹林	果樹園	3.8(1.0%)
O	畑	果樹園	果樹園	13.6(3.7%)

図7 果樹園に注目した変容パターン
Fig.7 Changing pattern in the land cover focusing on orchards

図8 土地被覆が不変だった箇所
Fig.8 Areas where the land cover didn't change since 1888

一方で、3時期において土地被覆が変わらなかった箇所を図8に示す。ただし、仮製地形図にのみ用いられる「榎林及柵林」は「広葉樹林」と、「松林(小)」は「針葉樹林」、「尋常荒地」は「荒地」と、それぞれ同じ凡例として扱った。土地被覆が変わらなかったのは、3時期を通じて針葉樹林、広葉樹林、水田が維持された場所であった。全体的には大きく土地被覆が変化の中で、変化しなかった箇所はわずかである。そのうち、「針葉樹林」であり続けた場所は、地区内神社の氏子の共有林である通称宮山に加え、東部の尾根線でみられた。聞き取り調

査によると、戦前の宮山はマツ林が多く、戦後にはスギ・ヒノキの植林も行われたが、私有林に比べ伐採が容易に進められない制度があった。地区東部の尾根線は、岩盤を主体とする土壌であり、現在でもまとまったアカマツ林が残存している。また、「広葉樹林」であり続けた場所は、北西部の急峻な斜面にまとまって見られる。「水田」であり続けた場所は、地区内を流れる小河川沿いの低地や、北西部の木津川に開いた扇状地などにまとまってあり、入り組んだ丘陵地地形という地形的な制約を受けながら維持されてきた。

V 考察

本研究では、京都府木津川市鹿背山地区を対象に1880年代以降の里山景観の変遷を明らかにするなかで、大都市近郊つまり市場の動向に直結した里山としての特質を具体的に示した。

鹿背山地区の里山景観は、1972年の土地被覆図に見られる果樹園の急激な拡大に代表されるように、他の研究事例^{3), 4)}と比較しても時代ごとに急激かつ一斉に変化してきた。それは、陶磁器生産を反映した森林部の景観のように、他地域の動向に左右される中で成立しながらも、他の多くの地域には見られない独特のものであったといえよう。

その変化においては、図8に示したように土地被覆の不変個所が極めて少ないことが明らかとなった。これは、常に住民の働きかけにより土地利用の最適化が行われ、土地がすみずみまで有効利用されていたことを示しているだろう。つまり、市場を見据え大消費地に近い立地環境を活かし、柿や陶磁器のような特徴的なものを生産する生業と、それを可能にする果樹園の拡大、畑の開墾拡大や、短い伐採周期の里山林利用のように、経済的な価値の追求という目的のもとで、積極的かつ能動的な土地利用と地域資源利用が、地域として継続されてきたのである。つまり、都市近郊の里山は、市場との関係性の中で積極的に変化していく場としての特質を持っていたと考えられる。その意味では、近年の竹林や耕作放棄地が

拡大する景観の変化は、開発による制限、あるいは管理放棄による受動的な変化であり、変化の質が異なる。里山としての特質の継承が危ぶまれている状況といえよう。

一方で、3時期の土地被覆図の重ね合わせから明らかになったように、水田や神社の氏子の共有林など、地域で暮らしていくうえで生活面や精神的にも基盤となる場所は、土地利用が大きく改変されずに維持されてきたことも重要な点である。こうした不変的な部分を、大きな変化の中でも合わせ持つことで、ひとつの地域としての継続性が保たれているとも言えるだろう。

以上より、景観が大きく変化する中でも、生業に結びついた地域資源との積極的な関係性があり、また地域の基盤となる土地利用が継続されていることが、都市近郊の里山景観の保全を図る際に継承すべき特質であると考えられる。

引用文献

- 1) 深町加津枝(2000): 農山村における土地利用とランドスケープの変化. ランドスケープ研究, 64(2), 147 - 150.
- 2) 横張真・渡部陽介(2009): 農山村における文化的景観の動態保全. ランドスケープ研究, 73(1), 10 - 13.
- 3) 後藤敏寛・小笠原輝・本郷哲郎・池口仁・武内和彦(2003): 山梨県郡内地域における土地利用と生物資源利用の変遷. ランドスケープ研究, 66(5), 569 - 572.
- 4) 深町加津枝・奥敬一・横張真(1997): 京都府上世屋・五十河地区を事例とした里山の経年的変容過程の解明. ランドスケープ研究, 60(5), 521 - 526.
- 5) 黒田乃生(2002): 白川村荻町の森林における利用と景観の変容に関する研究. ランドスケープ研究, 65(5), 659 - 664.
- 6) 藤原道郎(2005): 特集「景観形成プロセスの起点としての明治期の景観構造」特集にあたって. 景観生態学, 9(2), 1 - 2.
- 7) 相楽郡連合校長会(1959): 『私たちの相楽郡』. 相楽郡誌刊行会, 京都府.
- 8) 木津町史編さん委員会(1991): 『木津町史』. 木津町, 京都府.
- 9) 京都府立山城郷土資料館(1990): 『関西文化学術研究都市開発地区緊急民俗調査報告書』. 京都府立山城郷土資料館, 京都府.
- 10) 小椋純一(2002): 明治中期における京都府南部の里山の植生景観(京都府企画環境部環境企画課編, 『京都府レッドデータブック下巻』). 京都府企画環境部環境企画課編集発行, 京都府, pp. 354 - 371.
- 11) 印南敏秀(1986): 南山城の瓦づくり(京都府立山城郷土資料館, 『山城郷土資料館報4』). 京都府立山城郷土資料館, 京都, pp. 55 - 66.
- 12) 春日明(1993): 『一條家領鹿背山焼 附・近世銅版染付史』. 山城ライオンズクラブ, 京都府.

Summary

This study aimed to identify distinctive features of a *Satoyama* landscape in the Kaseyama District of Kizugawa City, Kyoto Prefecture since 1880s. The results showed that change was irrelevant in areas with rice fields or common forests, but that important changes had taken place in parts of the *Satoyama* landscape where crops, firewood, pottery and other goods for commercial use in nearby cities were produced. It was evident that rather than being defined by the existence of rice fields or secondary forests, the distinctive Kaseyama *Satoyama* landscape had in each period and throughout changes in society been a reflection of the process of active use of local resources for daily use or for commercial purposes.

(2009年5月15日受付)

(2009年11月14日受理)